

2026年4月12日 第二礼拝

説教題『主の御心が行われますように』使徒言行録21章1～16節

主任牧師 加藤 誠

「彼らは皆、妻や子供を連れて、町外れまで見送りに来てくれた。そして、共に浜辺にひざまずいて祈り…」(使徒言行録21章5節)

先週は恵みあふれるイースター礼拝を多くの方々と一緒にささげることができて感謝でした。イースターの数日前、家で長く療養中の方から「イースターのハガキに慰められました」と電話がありました。また施設に入所中の方のもとに届いたイースターのハガキを見た職員の方から「クリスチャンなんですか？」と話しかけられ会話が生まれましたというお話を聞きました。イースター礼拝に友人や家族を誘って一緒に出席されている方々がおられましたし、厳しい闘病中の方から「病室でオンラインで礼拝につながることができました」とLINEがありました。「墓の石は取り除かれた」。復活の主イエス、今この世界に働いておられる主イエスの希望のメッセージをこれからも多くの方と分かち合い、祈りを届け合っていきたいと願います。本日配布されたイースター委員会のニュースレターにもあるように「イースターで終わり」ではありません。「イースターは始まり」です。一人ひとりの歩みと教会の祈りが、隣人と世界に向かう「新しい一步の始まり」となることを祈りたいのです。

さて、今日からまた使徒言行録に戻りますが、今朝は「御心」について一緒に考えたいと思います。「御心」とは「神の意思、計画」を意味します。有名なのは「主の祈り」の中の「御心が行われますように。天におけるように地の上でも」（マタイ6・10）でしょう。「神の御心である愛と平和が地の上に実現しますように」という祈りです。この祈りは究極的な願いとして、ある意味「祈りやすい」ものだと思います。というのも、具体的な課題になればなるほど、「御心」が果たしてどこにあるのか、私たちには分からないことが多くなったりするからです。今朝、一緒に読んだ使徒言行録21章には「パウロのエルサレム行き」を巡って、人びとがパウロと意見が衝突し、悩み、葛藤している様子が浮かび上がります。パウロ自身は「危険が待つエルサレムに行くことを主の御心」として受けているのに対して、多くの人たちが“霊”に促されて反対しています。人びとに働く聖霊とパウロに働く聖霊とが衝突していることに「いったい、どういうこと？」と戸惑うわけですが、それくらい真剣にお互いの意見が衝突し、ぶつかったということでしょう。きっと言葉を尽くして語り、思いを聴き合ったのだらうと思います。それでも一致に至らない。そのような時、教会は最終的にどうしたか。5節を見ると、パウロを見送りに来た人たちは子どもたちも含めてみんなで「浜辺にひざまずいて」祈り、14節では「御心が行われますように」と祈ったのでした。わたしは「ここにこそ」聖霊の働きが示されていると受けました。人

びとに働いた聖霊とパウロに働いた聖霊はバラバラではない。聖霊はお互いに示されたことを胸襟を開いて率直に語り合うように導き、さらに一緒に祈り合うことに導いている。聖霊はそうにして彼らを教会として建てあげている。私たちはどうだろうか。そこまで聖霊の導きを受けて動かされているだろうか。意見が衝突したらそこでおしまい。諦めてしまっていることがないだろうか。意見が衝突するから一緒に祈る。そこに聖霊の働きがあり、そこに「御心」がなっていくことを覚えたいのです。

また「ひざまずいて祈る」ことに関しパウロはこう語っています。「わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。どうか、御父があなたがたの内なる人を強め、心のうちにキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」（エフェソ3・14以下）。誰の前にひざまずくのか。御父なる神の前に、十字架につけられた主、復活の命をあらわされた主の前にひざまずく。何を祈るのか。私たちがキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、その愛に根ざし、愛にしっかりと立つことができるように。そして私たちの思いをはるかに超えて御自分の御心を実現される神に栄光を帰すことができるようにと祈る。

このパウロの言葉に、自分は「ひざまずいて祈っているだろうか」と問われます。カトリック教会などでは、礼拝堂の椅子に「ひざまずいて」祈るための台があったり、主の晩餐のパンと杯に与るときに司祭の前に信徒がひざまずいて受けたりします。「ひざまずく」とは、神さまの前に心も体も低くすること。ゲッセマネの園の祈りで、主イエスはマタイ福音書では「地面にうつ伏せになって」、ルカ福音書では「ひざまずいて」祈っておられます。それに比べて、私たちの祈りは「頭が高い」ままというか、神さまの前に心も体も低くならない祈りではないでしょうか。

さらにこの場面のパウロに、わたしは自分の人生の上に「御心が行われますように」とどこまで祈っているだろうかという問いを受けます。佐藤優さんが若者向けに書いている本にこんなことが書かれていました。若い時は「生きるってどういうことか?」「愛とは?正義とは?」、人生に悩み、社会のあり方に疑問を持つ。けれども大人になるとこういう疑問を考えなくなる。社会に出て仕事をし、家庭を持つと、毎月の支払のこと、仕事のノルマや売り上げのこと、子どもの学校や親の介護のこと、年金のことなど、目の前の課題に追われて考えなくなる。けれども、あなたの人生を大切に生きるために、ぜひ聖書を開きながら「生きる意味」を真剣に考えていってほしいと。

私たちはどうでしょうか。毎日の目の前の暮らしに追われて、人生において究極的に目指すべきもの、大切にすべきものをしっかり見つめることができているでしょうか。パウロは自分の人生を主の証し人としてささげきることを日々の祈りとしていました。私たちも毎日の暮らしに追われて終わるのではなく、自分の人生において「主の御心がなりますように」と「ひざまずき」祈る者でありたいと思うのです。